

# マインド・コントロールとマインドセット

## — 戦後50周年・1995年という「時代」を読む —

教育学部 中川益夫\*

はじめに

1995年という年は、偶然も重なって、日本の現状を象徴する、真の意味で記録的な一年であった。

まず、1月17日未明に発生した「兵庫県南部地震」は、直下型地震となって大都市圏を襲い、「阪神・淡路大震災」として、都市型災害の恐ろしさを全国民に見せ付け、被害の影響は今も尾を引いている。地震国日本のいわば宿命ともいべき恐怖を、この年の冒頭にまず体験したわけである。なお、1月17日という日付には、91年の同月日、多国籍軍によるイラクへの武力行使の余波が重なる。

次に、3月20日首都圏に仕組まれた「地下鉄サリン事件」は、当初犯人が不明のまま、首都圏の住民、否、全国民をも震え上がらせた。これによって、経済大国日本と、諸外国から羨望される「豊かさ」の影に、命と暮らしが「公害」や事故、犯罪などの多発に脅かされる、もう一方の日本の姿が、全世界にクローズアップされる形となった。

前者は、いわば「前触れ」なしでありながら原因は「明白」な「天災」（だけではないが、ひとまず）であったのに比べると、後者は、あとで「前触れ」がいろいろあったことが判ったが、肝腎の原因が「かすみ」に包まれて、なかなか見当が付かなかった「人災」であった、と分類・区別することができよう。

さらに、9月4日、沖縄本島北部で、米兵が少女に暴行したという事件が起った。これは、原因も、歴史経過も「明白」で、類似の事件が、以前から幾つもあった上での出来事であった。独立国でありながら、「安全」を他国に依存していて、その国から「いじめられ」「いためつけられ」ている、悲しい日本の姿である。

最後に、1995年を締め括るかのように、日本の、ひいては世界の科学技術の「実態」を思い知らせる結果となったのが、高速増殖炉「もんじゅ」のナトリウム漏出事故であった。「絶対に起ってはいけない」「絶対起るはずがない」ナトリウムの漏出が、現実になってしまったのである。科学・技術立国をうたい、先進国に追い付き・追い越そうとする日本の、「安全と安心」を犠牲にしても突き進もうとする、強いのではなく「強がり」の日本の姿ではなかるうか。

以上を、今後の引用の簡略化のため、次のように記号で表すことにする。

A：兵庫県南部地震と阪神・淡路大震災

B：オウム真理教と地下鉄サリン事件

---

\* 教授 教育学部（応用物理学）

C：米軍沖縄基地と米兵による少女暴行事件

D：高速増殖炉「もんじゅ」ナトリウム漏出事故

こうすると、BとCは、この二つに共通する、人の心に巣くう「病める組織・人」から引き起こされた事件と整理することが出来、これがテーマの前半、マインド・コントロールに関連し、また、AとDは、いわゆる「安全神話」の崩壊であり、本小論のテーマの後半マインドセットに関連するというのが、筆者の出発点であり、要点でもある。

マインド・コントロール（mind control）については記憶に新しいところで、くどい解説は不要と思われるが、字義通りには「心の制御、統制」である。もう一つのマインドセット（mind set）については、載っていない辞書も多いので、ここに紹介しておく、「思い込み」あるいは「過信」と言うほどの意味で、特にスリーマイルアイランド原発事故以来、人口に膾炙した筈の用語である。筆者の論点は、この二つの用語にピントが絞られてくるはずである。

ただ、ここで、あらかじめ予想される反論を検討しておきたい。

まず、多くの人々は、1995年の日本に於ける大きな出来事とは、上の四つだけではない、というだろう、と予想される。

既に読者が気付かされている通り、筆者は、科学技術とその政策、というより、国民のいのちと暮らしの安全に深く関わる項目を挙げた訳であるが、それでも、前年から引き続いて諸課題、エイズ・ウイルス問題・住専問題・政治腐敗の問題、さらには広島・長崎被爆五十周年その他、掲げべき項目は、上の四つに尽くされているわけではないこと、もちろんである。しかし、それならば、1995年の1年間に現に起きた出来事、大きなインパクトを与えた全国規模の出来事を、読者には、他に幾つ挙げる用意があるだろうか。筆者から、問い掛けてみたい。

もう一つ予想される反論は、たまたま同じ年に、いわば偶然に起った出来事に、分類の、整理のと、堅苦しいことを論ずる必要はない、という主張である。

そうだとすると、歴史に於ける偶然と必然という、旧くて新しいテーマが思い浮かぶが、これとまともに取り組む時間的ゆとりが筆者には無いので深入りは出来ないが、結論から先に言うと、筆者は、まったく偶然の羅列とは見ていないのである。まさに、「時代」を読む眼、読み方に関わっていると考えているのである。「時代をどう読むか」という設問の下に、筆者のみかた・考え方を、この機会に模索し、整理し、提案してみようと考えたのが、本論の動機であり、狙いとするところである。

それにしても、十分な論述・説得もなしに、結論部分を先に多少押し付ける形になった点は御容赦いただくとして、以下に、AからDまで、順に説明しようと思う。

A：兵庫県南部地震と阪神・淡路大震災

1995年1月17日午前5時46分、淡路島の北端を震源とし、京阪神方向に向かって断層が走ったとされるマグニチュード7.2の地震が発生した。兵庫県南部地震である。その結果、神戸市を中心に、いわゆる直下型地震と類別される地震による都市災害が誘発され、後で問題になった「人災」も加わって、「阪神・淡路大震災」と命名された大災害が引き起こされた。これは、最近百年の間では、1923年9月の「関東大震災」に次ぐ大規模な災害で、単なる数字の比較だけでは済ま

ない面もあるが、表1に1994年にロスアンゼルス近郊を襲った、同じく直下型でM6.8のノースリッジ地震もあわせ、被害の比較対照表を掲げてみた。

今回の地震の特徴は、(関東大震災のときも同様だが)社会経済的な機能が高度に集積された大都市を直撃した都市直下型の地震であり、高速道路の倒壊、中高層ビルの崩壊、類焼・延焼による火災の被害等が著しく、また初動救援体制の不備、耐震設計基準や公園・緑地など都市施設の在り方、緊急時に於ける情報の伝達や報道の在り方、国・自治体の被災者への避難・救護対策をはじめ危機管理能力等がきびしく問われることになった。

特に今回の震災で印象強いのは、施設、とりわけライフライン (life line) の復旧に多くの時間がかかり、住居に被害を受けた世帯は、最大時で約32万人もの人々が避難生活を余儀なくされたことである。

表1 関東大地震、ノースリッジ地震、兵庫県南部地震の比較

震災名 (通称)	関東大震災	(ノースリッジ地震)	阪神・淡路大震災
発生の発端	1923.9.1	1994.1.17	1995.1.17
地震の規模	M7.9	M6.8	M7.2
最大振幅	14~20cm		
死者・不明者	14.2万人	57人	0.63万人以上
家屋全半壊	25.4万棟	9.3万棟	21万棟
焼失家屋	44.7万棟		0.7万棟 火災300件
津波	関東沿岸一帯 波高熱海で12m		津波よりも液状化現象 による被害大
被害額概算			約10兆円

データ引用 『理科年表』<sup>1)</sup>より 『国民生活白書』<sup>2)</sup>より 『朝日新聞』等による

筆者が一般・教養教育の授業でも感じたことだが、学生が身をもって体験した事柄には、極めて高い関心・興味を示し、その機会をとらえれば、やや高度で立ち入った説明・解説に及んでも、それらを受け入れ吸収する能力や理解力が旺盛になっているということである。

具体的例としては、地震の規模M (マグニチュード) と原水爆をエネルギーの点で比べてみることにした。図1にこれを示す。

今回の兵庫県南部地震で放出された地震のエネルギーは、グラフから、約45広島単位 (H. U., Hiroshima Unitの略) つまり広島原爆45個分程の破壊力の規模なのである。

この比較から、地震のエネルギーの巨大さが推測できるし、逆にまた、原爆は如何に殺傷能力が凄いかということも、感じ取れる筈である。現に、受講学生も、多数が、実感として掴める思いがしたと、感想を寄せてくれた。因みに、関東大地震 (M7.9) は約512広島単位、ほぼ水爆並の規模であったことも判る。ただし、エネルギーの単純比較だけでは不十分なこと、もちろんであるが、原爆被害と「自然」災害を比較検討する恰好のテーマがここにはある。

ところで、筆者がここで問題にしたいことは、マインド・コントロールとの関連で、今回の地震による「安全神話」の崩壊の問題である。

地震で放出された全体のエネルギー、つまりマグニチュードとは別に、震度という量がある。兵庫県南部地震の震度は、当初、神戸と洲本で震度6とされたが、その後の調査で神戸市等の一部地域では、記録の上で、日本で初めての震度7を記録したことが判った。これによって、神戸市を中心に、多数の建築物が崩壊し、鉄道・道路の寸断や通行不能、港・河川・海岸立地のコンビナート等施設に液状化現象による沈下・亀裂がおこるなど、国民生活に直結するさまざまな建造物が損傷を受けた。とりわけ象徴的だったのは、阪神高速道路の一部区間の倒壊である。

丁度一年前、ロサンゼルスが直下型地震で高速道路網が寸断されたとき、日本の建築の学者・技術者・専門家は、「日本では、同程度の地震に見舞われても、建築設計基準、建築技術のレベルが異なるため、あのような倒壊は起りえない」といった見解を發表した。しかるに、実際に、同程度の地震に見舞われてみると、「予想もしなかった原因」で、「予想もしなかった結果」が発生した。

すると、後になって、曰く、一本柱構造に欠陥があった、帯筋の密度（間隔）に問題があった、あるいは、工事に手抜きがあったのではないか、等々と、「あっさり」指摘する始末である。しかも、指摘する専門家の経験、見識、根拠に様々の違いはあっても、いずれにも共通することは、これまで信じられてきた「日本では安全」「日本では問題ない」という「安全神話」が、まったく根拠のないものであった、ということだけは明白であった。

この「安全神話」の崩壊については、Dの原子力発電における事故で再びとりあげるが、国民の命と暮らし、その安全に対して、行政と共に責任の一端を負う科学者・技術者の、真剣で深刻な反省が求められなければならないと筆者は考えるのである。

#### B：オウム真理教と地下鉄サリン事件

今、オウム真理教の教祖・麻原彰晃被告の裁判が進行中である。これまでの裁判などで、オウム真理教の全貌が次第に明らかになってきているが、出家信者のほとんどが十代後半から三十代の間の若者で、理工学部をはじめ有名大学出身者も幹部に少なからずいたこと、そして、この集団がどうして若者たちをひき付け、無差別・大規模の殺人を犯すに至ったのか、現代のわれわれに大きな問題を投げかけた。

一部若者がこの集団にひかれた直接的な動機には、二つが考えられる。一つは、オカルト・超能力への傾斜、もう一つは、自己自身の救済つまり「解脱」である。そこには終末（ハルマゲドン）への恐怖があり、オウム真理教では、それをヨガの修行によって克服できるという宣伝で若者を引き付けたことが考えられる。

事実、『ノストラダムスの大予言』が出版されたのが1973年、翌年のユリ・ゲラーによる超能力のテレビ登場、それらが74年のオイル・ショックという背景も手伝って、気分的に若者を駆り立てる状況が典型的に日本に生まれていた。これらがその後、コミックスやSF、TVなどとマスコミの波に乗って拡大され、若者の中に浸透・影響していった。そしてこの時期に、超能力や霊などを全面に押出して信者を獲得する新しい宗教集団の勢力が抬頭してきた。その代表的なも

のが阿含宗（あごんしゅう）で、麻原もこの阿含宗の信者であった。やがて麻原らは、新しい集団を作り、最終解脱に達したとして絶対的な権力を振るうようになってきたのである。

それにしても、地下鉄サリン事件という形で日本中の、否、世界の人々を驚かせた無差別・大量殺人事件に至るまでに、未然に防げなかったのは何故なのか。人間の生命、人間個々人の人権、根本的に大事な生命の尊厳といったことがらを、個人や一集団の判断でいとも簡単に踏み躪るといふ、反社会的・反人間的行為をどうして未然に防ぐことができなかつたのか、が問題になる。

そこには、先ほどあげた時代的背景のほか、社会的背景もある筈である。結論からいえば、この集団の無法ぶりを放置してきた警察と行政の責任の問題が浮かび上がってくる。

山梨県上九一色村において、異臭、騒音、建築基準法違反の建物建設など、常識では考えられない異常・不法の集団行動に対して、住民側からの苦情に耳を傾けず、それどころか、1989年には、東京都がオウム真理教を宗教法人として認可するなど、側面援助さえしてきたのである。

しかも、これに輪を掛けたのが、宗教学者らによる非合理主義、神秘主義潮流をニューアカデミズム、ニューサイエンスの名のもとに評価し礼讃する現象、また、これに積極的に宣伝の機会を与えるマスコミ・報道機関の社会的役割・責任の問題も見逃せない。

事件後、宗教学者らに、彼等の社会的責任を問う厳しい批判があがったのは当然である。オウム真理教の反人間性、狂暴性の点からも、また事件の担い手が、高学歴、理工系を含む青年・学生であったことから、大学に於ける教育のあり方の問題としても、検討されなければならない内容を含んでいる。

さて、ここでマインド・コントロールの意味・内容を比較検討してみよう。

たとえば、『大辞林』では、

- 1) 心を平静に保ったり集中力を高めたりするために、自らの心理状態を制御・調整すること
- 2) 他人の心理状態や態度を支配すること

『大辞泉』では、

自分の感情を制御すること。また、他人の心を自分の意のままに操ること、例えば、宗教などが独自の手段によって信者の人格・精神を変革・統制すること

といった、一般的な解説が述べられている。

『イミダス』（1996年版、集英社）<sup>3)</sup>では、

尊師のすべてを信じ、教団と教義に反するもの、敵対するものをすべて悪とみなし抹殺する精神の構造

という解説が行われている。

『現代用語の基礎知識』（1996年版、自由国民社）<sup>4)</sup>では、

人の思想・感情・行動を一貫性をもって一定の方向に人為的に変更させること。拷問や強制的な説得による「洗脳」とはちがひ、内在する不安や集団への依存心につけこむ。

などと、詳しい上に判りやすい。

『知恵蔵』（1996年版、朝日新聞社）<sup>5)</sup>では、

個性や創造性を強調する一方、偏差値を重視する——エリート主義

として、教育面での内容を重視し、強調している点がおもしろい。

今は、これらの優劣を論ずるつもりはないが、一年後には、解説にも進展がみられ、例えば、最近刊の『現代用語の基礎知識』の1997年版<sup>9)</sup>では、次のように、学説も加味されている。

オウム真理教の事件を契機に、カルト教団によるマインド・コントロールが社会の注目を浴びた。また、これらの人々をどのようにして救出し脱マインド・コントロールするかについて、新たな心の治療法とそのシステムをどのように確立するかも、わが国社会における新たな課題になっている。アメリカでのこの分野の専門家シンガー博士は、カルトによるマインド・コントロールを、「1)隠された意図、2)時間と環境のコントロール、3)無力感と教団への依存、4)古い行動様式の排除、5)新しい行動規範の浸透、6)「絶対的な教理」を挙げ、マインド・コントロールの結果として、「既成の人間関係の喪失、自主的な判断力の欠落、不安定な精神状態、時には独断的な妄想に取り付かれること、教団の束縛等によってこれらのカルト教団の意のままに動くような奴隷化の状態に陥る」と語っている。

最近では、マインド・コントロールはきわめて巧みな新たな社会心理学的な方法や、特定の薬物などの手法を用いてシステムティックに行われるようになってきているが、わが国においてもその対象の速やかな確立が望まれる。

以上をひとまず概観した上で、次に社会的影響の問題に移ることとする。

HIV（エイズウイルス）に汚染された血液製剤を注入されたことに抗議して、実名を公表して立ち上がった川田龍平くんの母親、悦子さんが、

龍平は先日、「厚生省の役人は上の命令だけで動くのではなく、命と人権を守る仕事なのかどうか、ほんとに自分の頭で考えて仕事をしてほしい。それができないなら、上の命令で大量殺人をしたオウムと同じじゃないか」といったんですよ。自分の頭で考える人間を作るにはやっぱり教育が大事で、学校の先生になって人を育てたいと言うんです。

（『グラフこんにちは』1995.11.5 No.250）

と述べている記事に接して、感動を覚えると同時に、教育学部に身を置き、一般・教養教育を担当している教師として、身の引き締まる思いがした。

従って、筆者は、教育との関連において解説した『知恵蔵』のような記述をとりわけ重視したい。というのは、他にも、意外と受け止められるかもしれないが、次の、沖縄における米軍の行動にも、通底するものがあると筆者は考えているからである。

### C：米軍沖縄基地と米兵による少女暴行事件

1995年9月4日、沖縄本島北部で、米兵が少女に暴行するという事件が起った。従来、沖縄では、これまでもよくあった事件の一つに過ぎなかったのだが、米軍用地の強制使用手続きの知事による代理署名を控えていた時期だったこともあって、知事をはじめとする沖縄県民の怒りに火が付いた。

9月28日、太田昌秀知事が沖縄県議会で代理署名拒否を表明し、10月21日国際反戦デーの一環としても設定された「沖縄県民総決起集会」に県史上初の8万5千人が立ち上がる壮大な運動に

発展していった。

戦後50年間のやや詳しい経過は表2に掲げた(太田昌秀『沖縄は主張する』<sup>7)</sup>より抜粋)項目を参照していただくとして、文字通り「基地の中の沖縄」の姿が、そこに読み取れる。

アジアの要石(キイストーン)とも呼ばれ、安保条約を盾に、世界有数の「対社会主義」防衛線の踏み石の役割を課せられ続けてきた。

そうした中で、火に油を注いだのは、本土政府の今回の事件に対する対応の鈍さ、誠意のなさだった、と言われている。それは、本土の沖縄に対する甚だしい差別的処遇、痛みを共有しない身勝手さの、表面に現れ出た氷山の一角だったのである。

こうなった原因も、煎じ詰めれば、戦前・戦後の教育にまで遡ることができるのではないか。つまり、本土日本人の沖縄観の形成の歴史に、教育が深く関わっていた、と筆者は見るのである。

表2 沖縄米軍基地にかかわる主な人身事件(事故は一応除外した \*印は歴史的事項)

---

*1945・3～6	沖縄戦 米軍政府設立
*1946・4・24	沖縄民政府発足
*1950・2・10	GHQ、沖縄に恒久的基地建設をはじめると発表
*1950・6・25	朝鮮戦争はじまる(～1953)
*1952・4・28	対日平和条約発効、沖縄・奄美は米施政権下に
1955・9・3	石川市で米兵、幼女を暴行・殺害
1959・12・26	金武村の演習場で米兵、農家の主婦を射殺
1960・3・10	伊江島の訓練場で米兵、住民を射殺(2名負傷)
1963・2・28	信号無視の米軍トラック、中学生をひき殺す(5月、米兵に無罪判決)
1963・7・1	美里村で女性、米兵に殺される
1966・7・21	金武村で女性、米兵に殺害される
*1969・11・20	佐藤・ニクソン会談。沖縄72年返還、核抜き本土なみに合意
1970・5・30	具志川市で米兵、下校中の女子高校生に暴行未遂
12・20	コザ市で米軍車両の人身事故をきっかけに住民騒動(コザ事件)
1971・4・23	宜野湾市で米兵、女性を暴行殺害
*1972・5・15	沖縄、本土復帰
12・1	コザ市で米兵、女性を暴行殺害
1973・3・18	コザ市で米兵が女性殺害(容疑者は帰国)
4・12	金武村ブルービーチ訓練場で米戦車が女性圧殺
1975・4・19	金武村で米兵、女子中学生に乱暴
1982・3・8	金武村で米兵、日本人男性を殺害
8・1	名護市で米兵、日本人女性を殺害
1983・2・23	キャンプ・ハンセン内で米兵、タクシー運転手を殺害
1985・1・16	金武村で米兵、就寝中の男性を殺害
*1991・1・17	湾岸戦争はじまる
1993・7・22	日本人女性に乱暴し、基地内に拘束されていた米兵、米本国に逃亡

- 1995・5・10 宜野湾市で米兵、日本人女性を殺害  
9・4 本島北部で米兵、少女に暴行  
\* 9・26 太田知事が県議会で代理署名拒否を発表  
10・21 県民総決起集会に8万5千人
- 

もちろん、教育だけに責任が帰せられる程に単純な問題ではないことも事実であろう。日本の敗戦、サンフランシスコ条約、つまり、アメリカとの単独講和、アメリカへの基地提供、朝鮮戦争による特需景気等を経ての対米経済従属、そして文化・教育・科学技術・思想面にまでいたる従属関係の拡がり等々、日本人の「寄らば大樹の影」意識にアメリカ側からの攻勢も加わって、独立国でありながら、次第に「従属性」を増していった経過がある。特に、旧ソ連と中国からの社会主義「侵略」に対抗して、日本の安全を「守ってもらおう」という国民意識は根強いものがあり、日本本土の一部は元より、沖縄等の犠牲も辞さない、という感覚すら否定できないものがある、と筆者は見ている。本土の日本人の多くは（もちろん、全部というわけではない）沖縄での出来事を、戦中・戦後一貫して、対岸の火事と見てきたのではないか。いや、そうだと断言しても良い。

筆者には、その「感覚」なるものが、男女差別や部落差別などが日本に根強く残っているのと同じ程度に、多分同じ根拠に由来しているものと思われてならないのである。

#### D：高速増殖炉「もんじゅ」ナトリウム漏出事故

1995年12月8日、太平洋戦争（Pacific war）へ突入した41年12月8日から月日も同じ54年目に、そして敗戦50年目に、福井県敦賀市で、動燃（動力炉・核燃料開発事業団）の開発になる高速増殖炉の原型炉「もんじゅ」で、二次系の冷却剤ナトリウムが漏出するという事故が発生した。

ナトリウムは水と激しく反応し、大気中の水分と接触しただけでも多量の熱を出して、同時に水素ガスを発生するために、たとえ核的・熱的性質からナトリウムの使用が避けられないとしても、それが生活環境に漏出することがあってはならないし、その為の万全の対策が講じられていたはずなのに、今回の漏出事故が起こったことは、当事者はもちろん、世界中の科学者技術者を始め広範な人々を驚かせる結果となった。いな、驚いたばかりではない。怒りをすら覚えさせ、深刻な憂慮に陥れる事態が付随して起こったのである。文字通り、日本の原子力発電の「安全神話」なるものが地に落ちる結果となった。

「もんじゅ」は、実験炉「常陽」による自主的試験研究の上に、1985年10月本格工事に着手、94年4月臨界到達、95年8月試験的に送電開始。電気出力は28万キロワットを予定している。

原型炉というのは、大型実用炉（いわゆる商用炉）に至る中間規模の炉で、設計・製作・建設・試験・運転を通じて、発電炉としての性能、安全性、さらには経済性までを実証する段階で、将来の実用化の段階に備える役割を果たすという目的をもっている。

「もんじゅ」は高速増殖炉としては日本初の発電を行った炉で、ヨーロッパ、アメリカではいろいろの技術的問題に断念もしくは足踏み状態の中で、諸外国から注目を集めていたところで



あった。

今回の事故については、その都度の新聞報道のほかに、公式には、原子力安全委員会による、『もんじゅナトリウム漏えいワーキンググループ報告書』の中の「もんじゅ2次系ナトリウム漏えい事故に関する調査審議の状況について」（抜粋）および「原子力安全委員会委員長談話」の部分が『日本原子力学会誌』<sup>9)</sup>にも掲載されたので、これによって状況を比較的客観的に把握することができる。

『ワーキンググループ報告』の「6. まとめ」の重要部分を以下に引用させていただく。

今回の事故は、放射性物質による環境への影響がなく、炉心や1次冷却系に安全上の影響は与えず、また、建家の健全性に有意な影響を与えるものではなかった。この意味で、原子炉等規制法が要求する災害防止上の観点からは、もんじゅの安全性は確保されたと考える。

しかしながら、もんじゅは、

- (1) 冷却材にナトリウムを用いて発電するという我が国において初めての技術課題に挑戦する研究開発段階にある原子炉であり、その運転そのものが研究開発の一環であるという性格をもつということ
- (2) 高速増殖炉開発という大規模かつ長期にわたる複数の段階からな研究開発の1段階を占め、前段階において得られた経験や技術を現段階に継承し、さらに発展させて次段階に継承するという役目を負っていること

という、安全性およびこれを支える技術基盤に関して特別な面をもつことに鑑み、これらを踏まえた視点から調査審議を行うこととした。

また、今回の事故は、高速増殖炉の開発計画におけるもんじゅの持つ意義の大きさから社会に対するインパクトが極めて大きいものとなった。そして、この事故により、一般社会のいう「安心」と技術的観点での「安全」との間に大きな隔たりがあることが、改めて認識された。このことに鑑み、安全確保に重要な役割を果たす事故時における危機管理体制が適切に整備され機能したのかとの視点から、動燃の対外対応等を含む情報の取り扱いについても調査審議の対象とした。

今回の事故には、

- (1) 「発生」の段階においては、温度計の設計ミス
  - (2) 「拡大」の段階においては、漏えい規模の不適切な判断
  - (3) 「対外対応」の段階においては、情報の不適切な取扱い
- という3つの重要な要因が含まれている。……………（以下省略）

多少引用が長くなったが、以下の論の展開に深く関係するので、途中の省略なしに引用した。

さて、筆者が高速増殖炉「もんじゅ」ナトリウム洩れ事故の報道に接したとき、真っ先に思い起こしたのは、1979年3月28日米国ペンシルベニア州スリーマイルアイランド原発事故と、その6か月後に出された“Report of The President’s Commission on The Accident at Three Mile Island”<sup>9)</sup>（邦訳『TMI原発事故報告』）で使われた“mindset”（邦訳「思い込み」）という言葉であった。原文とその邦訳をつけて引用してみよう。

In the testimony we received, one word occurred over and over again. That word

is “mindset.” At one of our public hearings, Roger Mattson, director of NRC’s Division of Systems Safety, used that word five times within a span of 10 minutes.

For example: “I think [the] mindset [was] that the operator was a force for good, that if you discounted him, it was a measure of conservatism.” In other words, they concentrated on equipment, assuming that the presence of operators could only improve the situation — they would not be part of the problem.

証言のなかで、我々は一つの言葉が繰り返し使用されたのを覚えている。それは「思い込み」という言葉である。NRCの設備安全部門のロジャー・マトソン氏は、我々の公聴会において十分間にこの言葉を五回も口にした。例えば、「運転員がおれば大丈夫だと思いこんでいました。彼を信頼しないということは、保守主義につながるのです」、といった調子に。言い換えると、運転員がおれば事態は絶対に円滑にいくというわけで、施設のことだけが念頭にあった。運転員が問題を起こすとは考えられないことだったのである。

After many years of operation of nuclear power plants, with no evidence that any member of the general public has been hurt, the belief that nuclear power plants are sufficiently safe grew into a conviction. One might recognize this to understand why many key steps that could have prevented the accident at Three Mile Island were not taken. The commission is convinced that this attitude must be changed to one that says nuclear power is by its very nature potentially dangerous and, therefore, one must continually question whether the safeguards already in place are sufficient to prevent major accidents. A comprehensive system is required in which equipment and human beings are treated with equal importance. ....

原発プラントが稼動して長年たったが、一般住民が被害を受けたという事例はなく、原発プラントは安全だという考え方が確信に変わっていった。スリーマイル島事故を未然に防止できた筈の幾つかの重要な段階が踏まれなかったのはなぜか、を考える場合に、こうした背景があったことは見逃せないのである。原子力は本来的に危険性の高いものであるという姿勢に切り替え、現在実施されている安全対策で十分に大事故が防げるものかどうかを常に反問して見る必要がある。本委員会は次のように確信する。すなわち、設備と人間が同じ重要性をもって取り扱われるような、総合的なシステムが必要である。 ....

The most serious “mindset” is the preoccupation of everyone with the safety of equipment, resulting in the down-playing of the importance of the human element in nuclear power generation. We are tempted to say that while an enormous effort was expended to assure that safety-related equipment functioned as well as possible, and that there was backup equipment in depth, what the NRC and the industry have failed to recognize sufficiently is that the human beings who manage and operate the plants constitute an important safety system. ....

最も重大な「思い込み」は、全員が設備の安全性を信じていたからで、そのため原子力発電における人的要素の重要性を甘くみてしまった。安全施設が十分にその機能を果たし、また補助施設が万全であることを確認するのに多大の努力を払ってきた一方、NRCと業界は、安全シ

システムにおいては原発プラントと管理運転する人間が重要な部分を占めるということを十分認識していなかった、といえる。 ……………

In conclusion, while the major factor that turned this incident into a serious accident was inappropriate operator action, many factors contributed to the action of the operators, such as deficiencies in their training, lack of clarity in their operating procedures, failure of organizations to learn the proper lessons from previous incidents, and deficiencies in the design of the control room. These shortcomings are attributable to the utility, to suppliers of equipment and to the federal commission that regulates nuclear power. Therefore, — whether or not “operator error” explains this particular case — given all the above deficiencies, we are convinced that an accident like Three Mile Island was eventually inevitable.

結論をいえば、この事故を重大なものにした主な要因は運転員の不適切な行動だが、訓練不足、運転手順の不明確さ、過去の事故から有益な教訓を学ぶという組織が欠如していたこと、制御室の設計上の不備などいろいろな要因が運転員のこうした行動を惹きこしたといえる。これらの欠点は、施設及びそのメーカー、それに原子力規制を担当する連邦委員会の責任である。

したがって、運転員の操作ミスだけで特定事例が解明できるかどうかは別にして、上述した全ての欠陥を考え合わせると、スリーマイル島事故は起こるべくして起こったものといえる。大変手厳しいが、極めて歯切れのいい報告である。ところが、この指摘が旧ソ連で生かされることなく、TMI事故をはるかに上回る事態を生んでしまったのである。そして、同じく日本においても十分に教訓を汲むことなく、マインドセットに浸り切ったまま、今回の「もんじゅ」ナトリウム漏出事故に至った、と筆者は考えるのである。

その証拠の一つに、このマインドセットが、日本では、不思議にも、大辞典といえども取り上げていない。マスコミも忘れてしまったようである。

手近な辞書で、例えば、Longman Dictionary of Contemporary English (第3版) では、  
mindset : someone's way of thinking about things, which is often difficult to change

／you need a logical mindset to develop computer program

また、C.O.D (第4版) では、

mindset : a fixed opinion or state of mind formed by earlier events

といった具合に、簡潔な例文を挙げた解説がある。しかし、日本語では、筆者の近くにある大小の辞典、情報誌を捜しても、見付からない。どれとどれに記載されていない、等と列挙することはやめよう。せめて一つでも記載例をあげたいが、今のところ見当たらない。筆者は、この機会も借りて、ぜひ、マインドセットという言葉が、貴重な教訓と共に、科学技術者はもとより、広く国民の中に定着されることを、強く訴えるものである。

#### BC : マインド・コントロール統論

先に、B : オウム真理教と地下鉄サリン事件のところでマインド・コントロールの解説では、『知恵蔵』が教育の観点から書かれていて筆者には興味深いと述べた。極く最近、同じく『知恵

蔵』の1997年版<sup>10</sup>が出たので、これを見ると、次のように新たな解説がある。

マインド・コントロール／洗脳 mind control, brain wash

教育は健やかな心を伸ばし、精神療法（心理療法）は病んでいる心を治す。しかし、教育者や治療者は「心変わり」の脇役で主役は本人である。これに対してマインド・コントロールや洗脳は、外部の操作によって本人が「心変わり」するので外部に主役がいる。本人に気づかれないで意のままに操作することが目的となる。「心変わり」の方法に共通するのは、相手の心に語りかけることだが、薬物を用いたり環境設定にも配慮する。ただマインド・コントロールでは、語りかけは執ように繰り返され、治療目的ではない薬物が使用され、不当に拘束するなど孤立した環境設定が行われる。生命の危険を感じさせて不安を募らせるほか、空想世界に導いて外部から操作しやすくもする。

この解説によると、先に引用した『現代用語の基礎知識』（1996年版）の「拷問や強制的な説得による『洗脳』とはちがい……」と言う解説と見解を異にするようで興味深い。ただし、今はこの違いを論ずるのが目的ではないし、余裕もない。人文・社会科学系の研究テーマの一つがここにもあることを指摘するだけに止どめておこう。

筆者がこの引用で問題にしたいのは、教育 Education とマインド・コントロールの違いという点である。上記『知恵蔵』の解説で、違いが、一見、明瞭のように読み取れる。主役が本人か外部にあるかの解説も判りやすいし、間違ってもいないだろう。しかし、教育のつもりが洗脳であり得ることはないのだろうか。過去ではどうだろうか。現在ではどうか。

直ぐに思い当たるのは、戦前・戦中の軍国主義教育である。中国や朝鮮、さらには東南アジア諸国において戦時中行った「教育」である。

もっと切実な、しかし、より曖昧な、現在の教育はどうなのだろう。いわゆる「赤化」教育の方だけを「洗脳」呼ばわりする傾向があるが、かつて日本が犯した侵略戦争を美化したり、美化とはいかないまでも侵略戦争と認めずに、教科書を改ざん・改定したりしている現状は、果たして、真の意味で教育に値するのだろうか。筆者は、この点での吟味・点検を素通りして、オウムの投げ掛けた問題を、一過性のものにしてはならないと主張したいのである。少なくとも、大学人、言論人は、この事を「現代の問題」として関連付けるべきだというのが、筆者の一番言いたい点なのである。

こうした筆者の観点に近い論文があった。『日本の科学者』1996年5月号の安斎論文<sup>11</sup>である。

安斎氏は「オウム真理教とエリート」と題して、いわゆる「十五年戦争」下の日本でも、たとえば731部隊による人体実験のように、最高学府の理系エリートたちが殺人者になった例などをあげ、「オウム真理教団の犯罪行為は、オウム自身の発明品というよりは、オウムが20世紀の戦争の時代の負の部分の徹底的に学びとって、世紀末にわれわれの目の前で再現してみせたという性格が強いように思われる」と述べている。

それから氏は、「なぜ、高学歴のエリート研究者がオウムに心傾けたのか？」と章立てして、外圧による、押し出し要因（“Push要因”）と魅力を感じて引き寄せられていく、引き寄せ要因（“Pull”要因）等の説明に移り、「おわりに」で次のように締め括っている。

このように見てくると、オウム真理教団に現代のエリート研究者たちが身を寄せ、反社会的な犯罪行為者にまで転落していった原因はかなり総合的なものだったと考えられるのである。問題は、こうした現象の背後に潜む現代社会の構造的な原因を明らかにしてそれを克服することであり、オウム真理教団関係者の犯罪行為そのものを解明しただけでは決定的に不十分だということである。

なぜ青年たちが不安に苛まれ、非理性に心傾けていくのか——その本質にメスを入れ、こうした行為を再生産しかねない社会のありようを変革し、教育のありようを含めて我々自身が抜本的な改革を担っていくのでなければ、将来に禍根を残すことになるだろう。

かくて筆者も、オウム問題と沖縄問題も、政治と教育、いや、あえて教育のありようの問題としてとらえて初めて解決の緒がつかめるものと考えていることを表明しておきたい。

#### AD：マインドセット統論

地震と、地震によって引き起こされた震災の拡大に、原子力発電事故と通底した「安全神話の崩壊」があったことは、既に述べた。「安全神話」とは「過信」であり、「思い込み」であり、つまりマインドセットである。マインドセットなる用語は1979年スリーマイル島原発事故で広く知られるようになったが、その後、一般大衆の用語からも、一部の原子力関係者の意識からも薄れていったように、筆者には思われる。マスコミでもすっかり影を潜めた。日本の辞書にも定席が見付からない。筆者は言語学分野の研究者ではないから、その詮索は置くとして、一体、スリーマイル島原発事故を通じて骨髓に徹した筈のマインドセットという概念は、それ程簡単に忘れ去られていいのだろうか。少なくとも、権威ありと定評のある辞書には、ぜひ掲載し、解説を加えてほしいものである。

こう力むと、読者の中に、「過信」とか「安全神話」という用語が昔からあるのだから、いいではないか、との反発を覚える向きもあろう。

さらに勘繰れば、当時では空前の事故だったスリーマイル島原発より桁違いに大きなチェルノブイリ原発事故を経験したのだから、スリーマイルは忘れてもいいくらいだ、との見解も予想される。

しかし、筆者に言わせると、「記録は塗り変えられるためにある」というのは一面の真理であっても、そんな感覚で科学技術者は言うに及ばず、一般民衆も、安全に対して傍観者の的になると、さらに輪を掛けた大きな事故を許し兼ねない。

マインドセット、つまり「過信」は誰にでもある、どこにでもある。それだからこそ、絶えず点検し、吟味し、確かめ合い、警告しあって、いつでもどこでも「初心」の気持ちで、生活に営業に、実験・研究・点検・保守・開発に従事したいものである。

#### ABCD：まとめにかえて——「時代を読む」から「時代を変革する」へ——

言葉遊びではないが、マインド・コントロールとマインドセットとはまったく別々の事柄だろ

うか。セットとして理解できるのではないか、というのが筆者の結論である。

今年12月6日から4回連続で朝日新聞社会面に掲載された「もんじゅの一年」の12月4日の4回目の記事が意義深い。

その記事によると、動力炉・核燃料開発事業団（動燃）の職員約2,800人の職員の中で、高速増殖炉の開発部門にいる650人は他の部門から、畏敬の念と、やっかみを込めて「Fの連中」と呼ばれているという。Fは高速増殖炉 Fast Breeder Reactor の頭文字である。

福井県敦賀市。動燃の高速増殖炉「もんじゅ」建設所の会議室に、数百枚のA4版の紙の束が積まれていた。こんな言葉が並ぶ。

「国家プロジェクトだというおごり」「親方日の丸意識」「動燃という枠の中の生活に浸り過ぎていた」

事故後の情報隠しの批判を受けて動燃は「意識改革」に取り組んだ。もんじゅ建設所でも階層や課別に職員が集まり、不信を招いた原因について自由討議を繰り返した。紙は討議で出た、動燃の組織と人間の「欠陥」を記したものだ。

「技術部門を中心に、おごりや一般の人を見下すような気風があった」と、副所長の大後はいう。（中略）

動燃の役員は自戒をこめていう。「技術者の『常識』は社会通念とかい離することがある。そういう意味で、オウムと同じだ」

「社会通念とかい離」というキーワードで、マインド・コントロールとマインドセット、つまり事象ABCDは内的につながった。

繋がりが出てみると、「ではどうすれば良いか」という方向も、見えてくる。現状から方向を変える主体は、社会を構成する全員であり、とりわけ、次世代を担う若者である、と考える。原動力は教育である。教育から立ち上がらねばならない。とりわけ、一般教育・教養教育から、行動を起こさねばならない。これが筆者の教育観であり、実践目録である。

1996年8月に実施された第19回中国・四国地区国立大学間合宿共同授業（於 香川県国分町青年センター）での講師を依頼された。教養教育で筆者が担当している主題別科目「原子力の平和利用」や「環境保全」、とりわけ夜間主での担当「現代科学と時代精神」等が、合宿共同授業のメイン・テーマ「時代を読む——現代科学とところ」に比較的近いということが、筆者への指名の理由であったようである。

その時筆者担当分の4時間のうち、約3時間を講義にあて、残りの1時間を導入と質疑応答に割り振った。この時の講義内容に基づいて、添削し、論文形式に仕上げたのがこの小論である。

蛇足になるが、今回の合宿共同授業のメイン・テーマ設定の趣旨には、次のように書かれている。最近、国際的にも国内的にも、社会を大きく揺るがす出来事が立て続けに起こっています。時代はまさに世紀末の混沌の状況を迎えていると言っても良いでしょう。このような中にあるのは、周囲に引きずられることなく自分自身の価値観を確立し、その上に立って世の中の流れを見極める能力が従来にも増して求められています。その意味で、ここ数年のメインテーマ「時代を読む」を引き継ぎ、今回は特に科学技術と人間のところの問題に焦点を当てたいと思います。

20世紀は、目覚ましい科学技術の発達によって人類の生活が飛躍的な変革を遂げた時代でし

た。しかし、その一方で、治安の悪化やいじめ問題など人間のこころの荒廃が進んでいます。また、科学技術の恩恵から取り残され、貧困と飢えに苦しむ多くの人達もいます。快適な生活の残滓と貧困の中での生存努力のいずれもが、地球環境悪化の原因ともなっています。さらに、科学技術の究極の悪用である核兵器が人類生存への重大な脅威となっています。

このような状況からみると、現在のままの科学技術の発達も21世紀においても人間生活の向上につながるかどうかには大いに疑問を抱かざるを得ません。折しも日本国内で、宗教団体による反社会的行為や高速増殖炉事故など、科学技術と係わる人間のこころを問題にすべき象徴的な出来事が起こっています。自然科学から人文・社会科学に至る多方面の講義にもとづいて議論をたたかわし、科学技術が真に人類の幸福につながる道をとともに考えようではありませんか。

引用が長くなったが、この呼び掛け文の起草者から、内容の一部を実は筆者の「講義要項」からも引用した、との知らせを受けた。ひとめぐりして、多少利子がついて、筆者の元に還付されてきたのである。関係者に感謝したい。

それにしても、筆者の論旨に、なおマインド・コントロールの臭いが付きまとい、どうも過信つまりはマインドセットの気配を感じてならない読者があれば、どうか啓発の一言を送っていただきたい。

#### 参考文献

- 1) 国立天文台編『理科年表』(1997年版、丸善)
- 2) 経済企画庁編『国民生活白書』(平成8年版、大蔵省印刷局)
- 3) 『情報・知識 imidas』(1996年版、集英社)
- 4) 『現代用語の基礎知識』(1996年版、自由国民社)
- 5) 『知恵蔵』(1996年版、朝日新聞社)
- 6) 『現代用語の基礎知識』(1997年版、自由国民社)
- 7) 太田昌秀著『沖縄は主張する』(岩波ブックレットNo.397 岩波書店)
- 8) 『日本原子力学会誌』(Vol.38,1996.10後付)
- 9) “Report on The President’s Commission on The Accident at Three Mile Island” (October 1979, Pergamon Press)  
邦訳は 米大統領特別調査委員会『スリーマイル島原発事故報告書』(1975.4ハイライフ出版部)
- 10) 『知恵蔵』(1997年版、朝日新聞社)
- 11) 安斎育郎「オウム真理教とエリート」『日本の科学者』(Vol.31, 1996.5 水曜社)

図1 地震の放出する総エネルギーと規模マグニチュードとの関係

